

学 位 論 文 要 旨

氏 名 長島 利行

題 目 高等学校の道德教育におけるモラル・スキル・トレーニングの開発的研究  
— 一定時制高校の事例を中心として —

第1章では、本研究の目的と方法について論じた。道德的スキルの習得だけでなく、道德的心情に基づいて道德的行動が行える手立ての一方法として、上越教育大学教授の林泰成(2000)が構想したモラル・スキル・トレーニングに注目した。本研究の目的は、高校版モラル・スキル・トレーニングを開発したうえで、高校生に実施し、その実践的有効性や課題を実証的に研究することにある。先行研究を検討すると、モラル・スキル・トレーニングに関する研究は、小学校低学年、小学校高学年、中学校と学年段階に応じて開発が進んでいるが、高校における研究は管見の限り見当たらない。また、高校における道德教育に関する研究は、高校の教育課程に道德の時間が位置付けられていないことから、極端に少ない。さらに、心理学的視点から見たスキル・トレーニングに関する研究として、ソーシャルスキルトレーニングやライフスキル教育の特徴について論じた。

第2章では、モラル・スキル・トレーニングの理論的検討を行った。すでに高校1年で道德を週1時間必修化している茨城県の高校の現状と課題を県作成の全高校対象のアンケート調査結果を基に分析し、モラル・スキル・トレーニングの必要性について論じた。また、高校におけるモラル・スキル・トレーニングの活動場面は、高校のどの教科・領域で取り組むことができるのかを考察した。林の構想するモラル・スキル・トレーニングや小・中学校版のモラル・スキル・トレーニングがそのまま高校生に活用することができない現状を指摘したうえで、高校の実態と高校の学習指導要領を踏まえ、高校において求められるモラル・スキル・トレーニングの指導形態を検討した。さらに、小・中学校における道德教科化の動向と関連させ、モラル・スキル・トレーニングの指導法が適切であるかを論究した。

第3章では、高校版モラル・スキル・トレーニングが、ペアで話し合った後に、グループで話し合い、さらにグループ毎の発表を経て、十分に他者の意見を聞き入れた後に、ペアでロールプレイをするという、これまでにない新しい工夫を取り入れた構成であることを提示した。プログラムは、その内容については事前に高校生対象の質問紙調査を行う等して、4編作成した。

第4章では、作成した4編を定時制高校の県立B高校生に実施し、モラル・スキル・トレーニングを実証的に分析した。まず、平成27年5月から7月にかけてモラル・スキル・トレーニングを行い、その事前と事後の2回に亘り道德性診断テストHEARTを実施した。また、事後には生徒対象の質問紙調査を行った。さらに、承諾を得た上で、生徒への聴き取り調査を行ない、データを収集した。質問紙調査の結果を分析すると、高校生がモラル・スキル・トレーニングを肯定的に受け止めていたことが確認できた。しかし、聴き取り調査の分析から、実践的課題として次の2つに集約できると考えられる。

1つは、人に興味関心を示さない生徒への対応であり、2つ目はロールプレイに恥ずかしさを感じる生徒への対応である。

第5章では、道徳の評価に関して、第2章で示した茨城県の高校の学校現場の現状を取り上げ、その特質と問題点を明らかにしたうえで、新たな観点別評価に基づく評価モデルを提案し、その有効性について明らかにした。そのうえで、高校版モラル・スキル・トレーニングをホームルーム活動で行うことを想定し、ホームルーム活動のねらいに即したあらたな観点を設け適切に評価することが重要であると指摘した。

第6章では、作成した高校版モラル・スキル・トレーニングを実際にA県内の全高校の教員（全県立高校96校、各校1人以上参加）や教員養成段階の大学生に実践し、事後に質問紙調査を行った。教員からは、生徒の実践力を高められる可能性を示唆する肯定的回答を得たが、一部の教員は勤務する高校で実践することを不安視していることが分かった。こうした動作や所作を伴う活動は教員対象の研修が必要であることが示唆された。さらに、教員養成段階の大学生対象の質問紙調査結果を分析した結果においても、支持されるプログラム構成であることが確認できた。

第7章では、全体的考察と残された課題を論じた。まず、本研究の要約したうえで、全体的考察を論じた。本研究が定時制高校における実践研究という立場から、高校生が道徳的行為を実現できる一方法としてモラル・スキル・トレーニングを提案できたことが何よりも意義のあるものといえる。なぜなら偏差値で輪切りされている高校の学校現場においては、こうした教育困難校で作り上げたプログラムに興味をもつ教員が多いからである。最後に残された課題として、高校の道徳教育や教科教育におけるアクティブ・ラーニングに関する実践研究がまだ少ないことから、今後進めていきたいと考える。